

\* 人物表

矢野八重子(77)末期癌患者。  
矢野瞳(22)八重子の孫、大学生。  
高島進(22)瞳の元恋人。  
高島香奈(22)進の妻。  
高島翼(1)進の子供。  
米田耕太郎(77)八重子の幼馴染。  
警察官

\* あらすじ

末期癌患者の矢野八重子(77)は生まれ故郷を見たくて、孫の瞳(22)と旅に出る。東京の大学生、瞳は一年半前、札幌の恋人、高島進(22)と別れた。進と友人の香奈との間に子供ができたからだ。進には連絡しないでおこうと思ったが、北海道に帰り、祖母の故郷に旅行すること、それが昔合宿にいった懐かしい森にあることを連絡してしまう。進は翼の誕生で野球選手の夢を諦め、失職し、アパートも追い出され、妻も出て行ってしまう。思いつめた進は翼と無理心中しようとする。その場所は子供の頃の懐かしい思い出があるあの森だった。

そこで八重子と瞳に会ってしまう進。八重子に心中を咎められ、「つまらない人生はいやだ、ただの人はいやなんだ」という。それに対し八重子は「ただの人でもそれは世界にたったひとりの人。自分にしか生きられない人生なんだ」と諭し、進は自分の人生を生きなおすきっかけをつかむのであった。

「ただの人、そして、たったひとりの人」

楓 はるひ

パソコンのキーボードを叩く。

矢野瞳(22) 「進くん、元気ですか？ 香奈と結婚すると聞かされた時はとてもショックでもう二度と札幌には帰らない思ってたけど、この夏休みに帰省することになりました。おばあちゃんがちよつと病気になるって…」

札幌ドーム。日ハム戦の歓声。

矢野八重子(77) 「かつ飛ばせ、稲葉！」

瞳 「おばあちゃん、あんまり大声出すと疲れちゃうわよ」

八重子 「瞳ちゃん、癌患者でもね、このくらい声は出るの」

瞳 「でも週末、おばあちゃんの田舎に行くでしょ。札幌から車で四時間かかるのよ、少し、体、休めないよ」

八重子 「応援している時は疲れないんだわ」

ボールがバットに当たって飛ぶ。  
歓声、拍手。

八重子 「わつ、ホームラン！ やったあ」

キーボードを叩く音。

瞳 「おばあちゃんと週末、旅行する予定です。覚えてる？ リトルリーグの頃、合宿に行

った町。山にカブトムシ、取りにいったよね、あの山の町がおばあちゃんの故郷なのです。

赤ちゃん、生まれたって聞きました。お幸せに。野球はもう続けてませんよね、ちよつと淋しいです」

メールの着信音。

高島進(22) 「(ため息) あーあ」

高島香奈(22) 「メール、誰から。瞳だったりして」

進 「な、わけねえだろ、別れて一年半だぞ」

テレビの野球中継。  
赤ん坊の泣き声。

進 「俺だって、稲葉くらいは打てたよな」

香奈 「進、夢見たいなこと言っていないで、翼のオムツ替えてよ」

進 「香奈、夢見たいなことって、なんだよ！ お前に子供出来なかつたら、野球、続けてた。大学もやめなかつた。ドラフトにもかかってた」

香奈 「どうでもいいけど、とにかく働いてよ。派遣切りでクビになったのはしょうがないけど、もう半年だよ。この部屋の家賃だつて滞納してるんだよ」

進 「だって、働いたら、一月のトライアウト、日ハムの入団テスト受けられないだろ」

香奈 「まだそんなこと言ってるの？ やつてられない」

進 「何、切れてんの？」

香奈 「働かないくせに、昔の彼女のことばかり、瞳のことばかり考えて」

進 「ああ、お前のせいで別れたからな」

香奈 「人のせいにしてよ」

香奈の頬を打つ、進。

進 「あつ、ごめん」

香奈 「私、出てく」

進 「翼はどうするんだよ！」

香奈 「進が面倒みればいいでしょ」

進 「無職なのは確かに俺が悪いよ、だから出て行くって、なんなのよ。子供、面倒みてって、なんなのよ。お前、母親だろ、母性ってものないのかよ」

パンと大きな音でドアが閉められる。

進 「何、ほんとに？ 出ていっちゃうわけ？ 香奈？ おい！ 嘘だろ…」

車のドアを強く閉める。

進 「あの大家、半年家賃滞納しただけで追い出しやがって」

翼(1)の泣き声。

進「泣くな、翼。こつちまで泣きたくなるじやないか」

小銭を数える音。

進「香奈のヤツ、三日も帰ってこねえ。ほんとは出て行きやがって…金、これしかねえじゃん。死ぬしかねえじゃん」

大きな声で翼が泣く。

進「なんでこんなことになったんだろ。リトルリーグで日本代表になった俺だけ、甲子園にも出た俺だけ」

キーボードを打つ音。

瞳「進くん、今、札幌にいます。会いたいけど、もう交差することのない道を走っている二台の車ですね、私たちは。だから会いません。おばあちゃんとこれからあの町に行きます。カブトムシを見つけた森に行きます。そこで昔の自分たちに会って、大切な思い出にします。それで充分です」

メールの着信音

進「瞳からだ…(ため息)なんかもうどうでもいいなあ。なあ、翼、死ぬか。香奈、苦し

ませてやれ」

翼、小さな声で泣く。

進「死ぬ前に瞳に会えたらなあ…あの森行ってみるか」

車の発進音。

八重子「運転上手だね瞳ちゃん。一緒に野球見て、旅行して、もう思い残すことないわ」

瞳「そんなこと言わないで」

八重子「ありがと。何回も手術して、放射線で焼いて、抗がん剤もやって。でも癌細胞は死なないの。旅行から帰ってきたらホスピスに入りなさいって、先生が言ったの」

瞳「うそでしょ」

八重子「ホスピス入ったからって死ぬとは限らないよ、人は病気では死なない、寿命で死ぬんだわ。でもね、覚悟だけはね。死ぬ前に自分の生まれた場所をもう一回見たかったの。なんぼ自分の息子でも、働いてる人にはなかなかわがまま言い辛くて」

瞳「で、夏休みで帰ってきた暇を持て余している学生の私が丁度よかったんだ」

八重子「それだけじゃないよ。瞳ちゃんと二人で旅行したかったの。たったひとりの女の孫だからね、東京の大学、楽しいかい？」

瞳「まあね。札幌にいるよりはいいかな」

川のせせらぎ、鳥のさえざりなどの自然の音。砂利道を車で走る。

瞳「この町がおばあちゃんの育ったところだって知らなかった」

八重子「おばあちゃんが結婚してすぐ、跡を継いでた兄さんが離農して、みんな札幌に引っ越しちゃったからね」

瞳「ここにね、小学校の頃、野球の合宿で来たことあるの。こんな小さな町にナイター設備の整った立派な球場があったわ」

八重子「瞳ちゃん、そう、野球やってたね。お転婆で心配したよ」

瞳「ふふふ。今は？」

八重子「おばあちゃんに似て、とつても別嬪さん。もう少し長生きしたら、瞳ちゃんの花嫁姿みれるねえ」

瞳「頑張ります！」

八重子「そうだ、進ちゃんだっけ？高校の時、よく遊びに来てた子、どうしたの？」

瞳「彼はもう結婚して子供もいるの」

八重子「まあ。いい縁談だと思ってたけどねえ」

瞳「東京の大学に私が行っちゃったから。離れるとね…ねえ、おばあちゃん、家、ないけど、もつと奥？」

八重子「まだ奥だよ」

瞳「こんな田舎ってどうか、山の中でどうやって暮らしてたの？」

八重子「牛飼ったり、畑作ったり、川魚取っ

たり、熊、撃つたりね」

瞳「熊！」

八重子「滅多になかったけどね。おばあちゃんのおじいちゃんという人が会津若松の出身でね、開拓農民として北海道に来たの。あつ、その道、右に入ってくれないかい」

車が止まる。

進「ここらへんだったな。瞳と一緒にカブトムシとつた森。あの頃はほんと楽しかった。よし、翼、もう少し奥まで行くぞ」

砂利道を走り、車を止める。

進「瞳、いないな。いるわけないか。大きい木だ。ここでいいか、翼」

翼の泣き声。

進「オムツか？取り替えてやるからな。ウンチつけたまま、死ぬのはなあ。古い家があるぞ、あそこでとりかえような」

朽ちかけた木の床を踏む。

翼、激しく泣く。

紙オムツをガサゴソやる。

進「よし、OKだ、リセット準備完了。俺の人生ゲーム、こんなんじゃないかった、香奈

に復讐してやるんだ。

翼、全然痛くないからな。首ってどうやって絞めるんだ？こうか？こうやってグイって力入れてか？」

翼の泣き声、どんどん小さくなる。

野球をやっている少年たちの音重なる。

進「子供なんていらなかったんだ。俺、ずつ

と野球やってたかったんだ…なのに…翼が生まれたから…」

翼「ばう、パッパ…」

進「えつ、ええつ！翼、お前、今、話した？」

翼「う、パッパ」

進「翼、しゃべった！すげえ…！俺、何やろうとした？首、締めようとしてたよな？翼を俺、殺そうとしてた。うわわあー」

進、走る。

手荒く車のキーを回し、発進させる。

車の止まる音。瞳と八重子の足音。

瞳「おばあちゃん、ここでいいの？」

八重子「そうだよ。懐かしいねえ。まだ家あるわ」

瞳「ここ、昔カブトムシ捕りに来た森のそばだよ」

八重子「二十歳で結婚するまで、ずっとここに住んでたんだよ。ランプで生活してた」

瞳「家の中、入ってみようか？」

朽ちた木の床を歩く二人の足音。

瞳「おばあちゃん、ゆっくり。怪我するわよ」

八重子「ガラスは割れちゃってるね。ここからよく、あの木見てたわ」

瞳「どの木？」

八重子「あの林檎の木」

翼の泣き声。

瞳「赤ちゃんの泣き声しない？」

八重子「こんなところかい？」

翼の泣き声。

瞳「ほら」

八重子「ホントだ」

二人、急ぎ足で歩く。

瞳「おばあちゃん、ここ！」

八重子「あれえー！乳飲み子でないの！」

瞳「とにかく、警察に連絡しよ」

携帯電話のプッシュ音。

瞳「圏外って今どき！おばあちゃん大変、ここ携帯通じない、どうしよう」

八重子「携帯って不便なものだね」

瞳「大抵は便利なの！ここは特別」

八重子「仕方ないねえ。お隣に電話借りに行くかい？」

瞳「来る途中に家なんかなかったじゃない」

八重子「あの右に曲がったところあるしょ、その反対側が米田さんっていう、お隣さん。」

六〇年前は。二キロくらい先だねえ」

瞳「六〇年前？二キロ！」

雨の音。

瞳「おばあちゃん、雨！雨漏りしてる」

八重子「この子濡れちゃうね」

瞳「早く車に」

車のドアが閉められる。

瞳「ふー、ひどい雨だった」

翼が小さく泣く。

八重子「よしよし。泣くんでない」

瞳「おばあちゃん、じゃお隣さんまで」

車の発進音。

車のエンジン音、急に止まる。

雨の音がフロントガラスを打つ。

進「あれ、おかしいな。俺、どうして車に乗ってんだ？ どうして、翼がいないんだ、どうして車が動かないんだ…どうして…すげえ雨…翼…翼…置いてきちゃった！」

車のドアを開け、雨の中に駆け出す進。

間

進「そう、この腐った家だ。翼、翼！」

あたりをやみくもに走り回る。

進「…いない…」

雨の中、走る進の足音。  
トラクターが走っている。

進「（息が切れている）すみません、すみません」

米田耕太郎（七七）「兄ちゃん、どうした」

進「子供が誘拐されました！」

米田「誘拐？」

進「警察に連絡して下さい」

米田「よし。このトラクターに乗れ」

トラクターの走る音。

米田「子供っていくつ？」

進「一歳になったばかりで」

米田「何でそんな子から目を離した？」

進「俺、どうかしてたんだ。仕事クビになって、嫁さんに逃げられて、アパート追い出されて。子供も殺して、自分も死のうと思ってる、でも子供が話した！なんかかわかないけど、しゃべったんだ。それで俺、翼を殺そうとしたことが怖くて、逃げて。気がついたらガス欠で車、止まった。翼を探しにいったらもういなくて」

米田「しっかりしないか！」

進「…（泣き声）はい」

米田「それに、そりゃ誘拐じゃないだろ」

トラクターが止まる。

米田「ここ俺の家だから。ちょっと待ってろ」

ダイヤルを回す音。

米田「山の米田ですけど。駐在さん、子供がいなくなったらしいんだわ。すぐ来てくれるってかい？ 助かる。でも三十分はかかるっしょ。ああ、それまでいなくなつたとこ、もう一回、見てくるわ」

受話器を置く。

米田「おい、兄ちゃん、警察来るまで、あたり捜すぞ」

進「（泣き声）…あ、はい、お願いします」

トラックターを動かす。  
車の音。

瞳「ひゃあ、危ない、大きなトラックター」

ハンドルを切る。

米田「見たことない車だなあ」

進「…翼…(泣き声)」

車が止まる。

八重子「ああ、ここだよ。米田さんの家、昔と変わらないわ」

引き戸を開ける。

瞳「ごめんくださいーい。ごめんくださいーい…おばあちゃん、お留守みたいよ」

八重子「上がって電話、借りるかい？」

瞳「だめよ、住居侵入になっちゃう。どうしよう」

八重子「家に戻ろうか？ この子の父さんか、母さん、捜してるかもしれない、ひとりで来たわけないんだから。見つからなかったら、町まで下りて警察に連れていったらどうだい？」

瞳「そうね、捜してるかもね」

車の止まる音。

米田「ここか」

進「そうです」

米田「八重ちゃん家だったか」

進「八重ちゃん？」

米田「六〇年近く前に離農したけどな。俺と同級生の可愛い子がいてな、そういう子から片づくもんで、早くに札幌に嫁に行っちまった」

進「あの、そんなことより、翼を」

米田「そうだな、どこに子供置いたんだ？」

進「あの腐った家の中です」

車を止める。

瞳と八重子、下りて歩く。

瞳「おばあちゃん、中にいてもいいのに。危ないわ」

八重子「大丈夫、自分の家の庭だよ」

翼が小さな声で泣く。

八重子「よしよし」

間

米田「子供の泣き声が聞こえなかったか？」

遠くから翼の泣き声。

進「あつちだ」

米田と進、草を分けて走る。

米田の足音止まる。

米田「おい！」

瞳「きゃあ、誰」

八重子「熊かと思った」

翼の笑い声。

進「(息が上がっている)翼！ 大丈夫か。お前らだな、誘拐したの！」

瞳「進くん？」

進「瞳？」

瞳「進くんね。どうして、ここにいるの？ この子は進くんと香奈の子？ どうして赤ちゃん、一人で家の中にいたの？」

進「瞳だ…本当に瞳だ…会いたかったんだ、このカブトムシの森で」

翼、きゃきゃと笑う。

八重子「ほれ、翼ちゃんっていうの？ お父さんだって」

瞳「おばあちゃん、進くんだよ」

八重子「あの、野球やってた？ 進ちゃん？」

瞳「そう」

八重子「あれえ、大きくなって。この子のお

父さんなの？」

瞳「みたい……」

八重子「こんなところに子供置いてどこ行つてたの。なんでこんなところ来たの？」

進「なんであって……」

米田「死にに来たんだと」

八重子「死にに、つて……」

瞳「自殺ってこと？ どうして！」

進「何もかもどうでもよくなって、死のうと思つて、そしたら瞳がメールくれて、カブ

トムシの森、思い出したんだ。瞳に会えるかな、とちらつと思つて。どうせ死ぬなら

一目、瞳に会ってから死にたかつた」

八重子「何、馬鹿なこと言つてるの、この子

あんたがいなかったら、どうなると思うの？」

進「だから、翼も一緒につて思つたんだ。でも、翼の首に手をかけた時、言つたんだ、

まだ一歳になつたばかりなのに“パパ”つて。確かに言つたんだ」

瞳「うそ……」

進「その時は確かに言つたんだ。それから先

はよく覚えてない、怖くて、逃げて」

米田「ガス欠になつて、雨に打たれて、目が

覚めたんだな」

瞳「どうしてそんなことしたの！ 私の知つて

いる進くんじゃない！」

進「だつて……全てが上手くいかななくて。派遣

切りで工場もクビになつて。大体、俺は工場で働くような人間じゃないんだ。イチロ

ーや岩村になるはずだつたのに」

八重子「イチローや岩村になんか、普通はなれるもんじゃないよ。ただの人なんだから」

進「それがいやなんだ」

八重子「そうでもないよ。私はこの古い家で

生まれたの。そしてただの人としてこの年

まで生きてきたの」

米田「この家つて、あつ、もしかして八重ち

ゃんかい？ なんか似てると思つただけ

ど、俺、米田っちの耕太郎だ」

八重子「こうちゃん？」

米田「やつぱり、八重ちゃん！ 懐かしいなあ」

瞳「おばあちゃん、誰？」

八重子「さつき行つたお隣の人。おばあちゃんと同級生だつたの」

米田「何十年ぶりだ？」

八重子「五十七年ぶり」

米田「そんなになるか？ 元気でなによりだ」

八重子「それでもないんだけど……進ちゃん、

この子のおかあさんはどうしたの」

進「逃げられました。俺が失業したから」

瞳「まさか！ 香奈は進のこと、ほんとに好きだつたのに」

進「瞳と結婚した方がよかつた」

瞳「振られたの、私なんですけど」

進「だからそういうこと全部含めて、俺はリ

セットしてやり直すつもりだつた」

米田「それで無理心中か」

八重子「自分で生まれ変わつて……」

八重子「自分で死ななくても、人は必ず死ぬ

んだから、慌てることないわ。それに進ち

ゃんには希望があるから、死ねないね。人が死ぬのは絶望した時だけだわ」

進「希望なんかない、もうどこにも」

八重子「あるでしょ。この子が”希望”」

翼、きやきやと笑う。

八重子「ほれ、この笑い声。これが希望でな

くて、何が希望なの？」

進「俺は翼に何もしてやれない、だからいつ

そのこと二人で死んでしまった方が……どう

せただの人なんだから」

八重子「ただの人がどうして悪いの？」

進「つまらないから。そんな人生」

八重子「わたし、末期癌なの」

進「末期癌？」

米田「ほんととか、八重ちゃん！」

八重子「はい。もう手の施しようがなくて、

ホスピスに入るようにいわれたの。でね、

死ぬ前に自分の生まれたところ、もう一回、

見ておきたかつたの。人生の始まりの場所

をね。

進「進ちゃん、私はただの人。でもね、それ

をいやだと思つたことは一度もないよ。平

凡人人生だけど、だからといって私と全く

同じ人生を生きる人は誰もいなかった。

ただの人だけど、世界中でたったひとりの

人だよ」

進「……慰め、言われても」

瞳「進くん、翼ちゃんつて男の子？」

進「ああ」

瞳「大きくなったらキャッチボール出来るね。」

翼くん、お父さんの野球の上手さ、きつと自慢するよ」

進「何言ってるんだよ」

瞳「香奈に赤ちゃんができたって聞いた時、私がどんな思いであきらめたと思ってるの？」

進「えっ？」

瞳「(涙声)翼くんのいいお父さんになって。前のように自信に溢れた進くんできて。いつまでも私の夢でいて」

進「瞳…」

パトカーのサイレン。車の止まる音。

警察官「米田さん、ここだったか。いなくなつた赤ん坊っていうのは？」

米田「ああ、駐在さん。今、見つかったんだ。ほれ、この子。そして、これが父親。やつ

と今、父親になったところだ」

警察官「父親になったところ？」

キーボードを叩く。

瞳「進くん。そちらの生活はなれましたか？」

米田さんのお世話で農業をやると聞いた時には驚いたけど、翼くんのためにも大自然の中での暮らしはきつといいでしょう。少年野球の指導を始めたとき聞いた時は本当に

嬉しかった。それから二人目、出来たんで

すって？最近、香奈と時々メールしてるんです。ちよつと懲らしめるつもりだったのに、心中しようとしたと聞いて心臓止まりそうだったと書いてありましたよ。

うちのおばあちゃんは奇跡的に癌の進行が止まり、ホスピスを一旦退院ということになりました。ただの人ですけれど、一筋縄ではいかないたったひとりの人です。今日はこれから二人で日ハムの応援です」

札幌ドーム、歓声。ホームランの音。

八重子「やったー、稲葉！ホームラン」

瞳「おばあちゃん、興奮すると疲れるよ」

八重子「でも、生きてるってそういうことですよ」

(了)